

【研究論文】

婚姻儀礼における擬死再生のモチーフ

— 徳島県那賀郡木頭村の事例より

小野寺 綾

一 はじめに

通過儀礼の基本構造を整理した代表的な著作に、ファン・ヘネップ『通過儀礼』（一九〇九）がある。ヘネップは、通過儀礼とは主に人生の節目の通過時に行なわれる儀礼であり「ファン・ヘネップ 一九七七 九」、あらゆる通過儀礼は「分離」「過渡」「統合」の三つの段階を踏むことによつて成立すると論じている「ファン・ヘネップ 一九七七 九」。同時に、通過儀礼には時として、「死と再生」の観念も含まれると述べている「ファン・ヘネップ 一九七七 一五六―一五七」。

通過儀礼については、これまで文化人類学や民俗学の見地から多くの研究がなされている。特に婚姻儀礼については、その中に含まれる「擬死再生」の観念に焦点を当てた研究が進められてきた。江守五夫は、婚礼と葬礼の習俗との間に類似性を見出し、婚礼を葬礼に擬する一連の習俗のうちには、「死と再生」の観念がともなっていると論じた。嫁は生家を出る時に生家の人間として死し、婚家に入る時に婚家の人間へ再生するというので

ある。その上で、婚姻儀礼における「死と再生」の観念は、葬礼への擬装によつて悪霊の目をこまかし、新郎新婦を危険から防ごうとする呪的心理の到達点であると述べている「江守 一九八二a」。また藤田稔によると、人の一生（誕生、結婚、死）は魂に関わる儀礼であるといい、婚姻儀礼に「死と再生」の観念がみられるのは、花嫁の肉体とともに魂が移動するからであるという「藤田 一九八五」。通常の「生から死」へと一方方向の時間を「死から生」へと逆転することで、「非日常性・ハレ」を強く認識させる役割があるという論もある「鈴木 一九九八」。

これまでの先行研究の多くは、婚姻儀礼の中に「擬死再生」の観念が含まれることを指摘した上で、その理由について論じている。しかし、具体的にどのような過程（儀礼の積み重ね）を経て「擬死再生」が達成されるかという問題については、従来の研究では「嫁は生家を出る時に死し、婚家に入る時に再生する」「江守 一九八二a」というような単純なとらえ方が多く、十分な検討がなされているとは言えない。

本研究の目的は、徳島県那賀郡木頭村の婚姻儀礼を事例として、具体的

にどのような儀礼の構成要素が積み重ねられて「擬死再生」（生家からの分離／婚家への統合）という目的が達成されているのか、そのメカニズムを明らかにすることにある。分析対象としては、「擬死再生」の観念が見られやすい、伝統的な婚姻儀礼を取り上げた。調査対象地域に那賀郡木頭村を選定した理由は、村内に結婚式場がなく、伝統的な婚姻の形態を比較的に残していると考えたからである。

木頭村は徳島県の南西端に位置し、東は上那賀町、南は海部郡海南町・高知県安芸郡馬路村、西は高知県安芸市・同県香美郡物部村、北は三好郡東祖谷山村・木沢村に接している。徳島市へ一〇キロメートル、阿南市へ八四キロメートルの位置にあり、剣山山脈・海部山脈に挟まれた山間の村である。

村の中央を国道一九五号が東西に横断し、那賀川とほぼ併行して走る。村の面積の約九八パーセントを山林が占め、平地は那賀川に沿った段丘面のみである。木頭村の生業は主に林業である〔角川日本地名大辞典編集委員会 一九八六 二八四、九一五―九一八〕。

二 木頭村における婚姻の事例

本章では、聞き取り調査（二〇〇三年八月実施）によって得ることができた、木頭村における婚姻儀礼の事例を五例紹介する。記述にあたっては、婚姻儀礼を（i）婚礼前、（ii）婚礼当日、（iii）婚礼後の三つの段階に分けて紹介していく。

【事例1】（嫁入り）

インフォーマントは一九〇二年生まれの男性。戦前、夜這いで女性と仲良くなり結婚した。

（i）婚礼前

仲人がネキリ酒として酒一升とスド（二匹の生魚を腹合わせにし、藁の東の中に入れ、縛ったもの）を婿方から嫁方へ持っていった。その酒を嫁方が飲むと、嫁方は娘を嫁に出さなくてはならず、この時点で嫁は実家との縁（根）が切れると言われていた。

（ii）婚礼当日

当日の夕方、仲人夫婦、婿の兄弟、婿方の親戚が連れ立って歩いて嫁迎えに行った。花嫁行列の際には何人かが嫁入り提灯を持って歩き、婚礼の際には嫁は白無垢、婿は紋付き羽織・袴を着ていた。

【事例2】（嫁入り）

インフォーマントは一九一〇年生まれの男性（木頭村和無田地区出身）。結婚した年は一九三八年。仕事上付き合いがあった人の紹介で見合いをし、返事をする事もなく結婚する話はもうすでに決まっていた。

（i）婚礼前

仲人が、婿方から嫁方へネキリ酒の酒一升とスドを持って行った。

（ii）婚礼当日

当日の夕方、仲人夫婦、婿方の親戚一人が酒を持って歩いて嫁迎えに行った。仲人達一行が到着すると、嫁方では小規模なカドイレ（祝宴）が行なわれた。カドイレでは組内の人が料理等の手伝いをし、嫁方の親戚が集まり嫁との別れの共食を行なった。頃合いを見て、嫁は仲人夫婦、兄弟、婿方の親戚、カイゾエと共に縁側の窓から家を出た。

花嫁行列の際は、何人かが嫁入り提灯を持っていた。花嫁行列が婿家に

到着すると、縁側の窓から婿家へ入った。

嫁の服装は銘仙の着物、婿は紋付き羽織・袴を着ていた。嫁の服装は、経済的に婚礼用の着物（白無垢）を準備する余裕がなかったため、祭りの時に着る暗着を用いた。婚礼では夫婦の盃、親子の盃を行ない、盃が終わるとそのまま祝宴が始まった。祝宴の参加者は仲人夫婦、婿の両親、婿の親戚、組内、友人、嫁方から付き添ってきた人々であり、組内の人が料理等の準備を手伝ってくれた。一人ずつのお膳料理・酒が振舞われ、踊りや歌の余興があつた。嫁は祝宴の途中からお酌や料理を運ぶのを手伝っていた。

(iii) 婚礼後

婚礼の翌日には仲人が嫁を連れ、組内を挨拶して回る「初歩き」を行なった。婚礼から一週間以内に嫁は婿、姑とともに里帰りを行なった。夫婦は一泊二泊し、姑は日帰りであつた。

【事例3】(嫁入り)

インフオーマントは一九二二年生まれの女性（木頭村助出身）。夫は一九一八年生まれ（木頭村助出身）。結婚した年は一九四〇年。夜道いによって仲良くなり結婚を決めた。仲人は、親しい仲であつた農家の人に頼んだ。婚礼は全体的に質素に行なわれた。

(i) 婚礼前

ネキリ酒は行なわなかつたが、ちゃんとした家は行なつていた。

(ii) 婚礼当日

当日の夕方、仲人夫婦が嫁迎えに行った。嫁方でカドイレは行なわず、嫁迎えが来ると嫁は両親に挨拶をし、仲人夫婦、親戚二人（叔父・叔母）、カイゾエ（同年代の友達）一人とともに縁側の窓から家を出た。

嫁が婿家へ到着すると、縁側の窓から六畳間の部屋に入り、すぐ婚礼が始まった。嫁の服装は、経済的に準備をする余裕がなかったため、祭りの時に着るような暗着と羽織、婿は紋付き羽織・袴を着ていた。

婚礼では、まず仲人の挨拶があり、夫婦の盃、祝宴へと続いた。祝宴の参加者は仲人夫婦、婿の両親、婿の親戚四、五人、組内七人（一軒一人ずつ）、嫁方から付き添ってきた人々であつた。祝宴での料理は一人ずつのお膳で鮎の寿司、吸い物等が出され、酒を飲みながら雑談をしたり、歌を歌ったりして盛り上がった。嫁は祝宴の途中から普段の着物に着替え、お酌や料理を運ぶ手伝いをした。

(iii) 婚礼後

婚礼の時に参加者に挨拶をしたので、初歩きは行なわなかつた。婚礼から一週間以内の時間が空いた時に、嫁は婿とともに一泊の里帰りを行なった。

【事例4】(婿入り)

インフオーマントは一九三一年生まれの女性（木頭村出原出身）と、婚礼の仲人をした一九二〇年生まれの女性N氏（木頭村出原出身）。インフオーマントの夫は一九三二年生まれ（上那賀町出身）。インフオーマントが結婚した年は一九五七年。仲人の祖母の里（上那賀町）に年頃の男性がおり、仲人が縁談を持ちかけ、見合いをした。仲人のN氏は仲人経験が豊富であり、木頭村の婚礼にとっても詳しい方である。

(i) 婚礼前

仲人夫婦がネキリ酒として、酒一升とスドを嫁方から婿方へ持って行った（婿入りのため）。この酒を受け取った側が飲めば結婚の承諾・決定と言われ、相手の（嫁入りであれば嫁の、婿入りであれば婿の）根を切る意味

もあると言われていた。

(ii) 婚礼当日

当日の昼過ぎ、仲人夫婦と嫁の叔父が婿を迎えに行つた。仲人一行が到着すると婿方ではカドイレが始まつた。カドイレには親戚、組内が集まり、お膳の料理や酒での祝宴が行なわれた。カドイレが盛り上がった後、婿は仲人夫婦、兄弟、婿の親戚、嫁の叔父と共に縁側の窓から家を出た。婿入りだったのでカイズエはいなかつたが、N氏が知る限り、嫁入りの場合は、必ずカイズエが付き添っていた。

行列で嫁方へ行く際、広い道は車で行つたが、途中からは提灯を持って歩いた。婿の一行が婚家に到着すると、縁側の窓から婚家の中に入り、客間へ行つた。仲人のN氏によると、嫁入りの場合は、必ず姑が嫁の手を引いて勝手口から婚家へ入るそうである。ここに嫁入りと婿入りの違いが見られる。

嫁の服装は白無垢の上に黒の喪服を重ねて着て、頭には白の角隠し、婿は紋付き羽織・袴を着ていた。N氏によると、時代が下りるにつれ、花嫁の衣装は白無垢の上に黒の喪服を重ねて着る形態から、黒の江戸袷模様の留袖、黒の振袖へと変化していったという。婚礼の手順はまず婿、嫁、仲人夫婦、幼い子供二人(酒を注ぐ役)が別室へ行き、夫婦の盃を行なつた。その後客間に戻り親子の盃をし、仲人の挨拶、婿側の親戚の挨拶、嫁側の親戚の挨拶、祝宴が始まつた。祝宴の参加者は仲人夫婦、嫁の両親、嫁の親戚、組内、婿方から付き添ってきた人々であつた。祝宴での料理は家で作つた一人ずつのお膳で鮎の寿司、刺身、吸い物等が出され、酒を飲みながら歌や踊りが賑やかに行なわれた。嫁は別室での盃が終わると普段の着物に着替え、少しお酌をした。

(iii) 婚礼後

祝宴の時に婿は皆に挨拶をしたので、翌日組内への挨拶回りはしなかつた。婿の里帰りはいつ行つたかは不明であるが、婿と嫁で行つた。それから数日後、婿の兄夫婦が嫁方へ挨拶をしに来た。

【事例5】(嫁入り)

インフオーマントは一九三一年生まれの男性(木頭村折宇出身)と一九三七年生まれの女性(木頭村西宇出身)の夫婦。結婚した年は一九五九年。二人とも同じ製材所で働いており、その社長が縁談を持ちかけ、いつのまにか結婚することになった。仲人は、嫁の親戚で一番気安くしていた人に頼んだ。

(i) 婚礼前

婚礼の約一、二カ月前に、仲人夫婦がネキリ酒として酒一升とスドを婿方から嫁方へ持つて行つた。この酒を嫁方で飲んだら、嫁方は娘を嫁にださなくてはいけないと言われていた。

(ii) 婚礼当日

当日の夕方、仲人夫婦と婿の叔父が嫁迎えに行き、仲人一行が嫁方の家に到着すると、嫁方ではカドイレが始まつた。カドイレには親戚、組内が集まり、組内の人がお膳の料理を手伝ってくれ、酒を飲む等の祝宴が行なわれた。頃合いを見て、嫁は仲人夫婦、兄、製材所の社長(嫁の従兄弟)、婿の叔父、カイズエ(髪結い)と共に縁側の窓から家を出た。

花嫁行列の際には、三人くらいが提灯を持って歩いた。この嫁入り提灯は暗くなくても必ず持つ物とされていた。

花嫁行列の一行が婚家へ近づいてくると、サキバシリの人が婿に知らせに来た。婚家に到着すると、嫁は姑に手をひかれ勝手口から婚家の中に入り、その他の人は縁側の窓から床の間へ行つた。嫁の服装は黒の留袖(花

柄付き)に頭には白のヤロウ(角隠し)、婿は紋付き羽織・袴を着ていた。

婚禮の手順は、まず床の前に婿・嫁が並んで座り、「今から盃に行つて来ます」と皆に挨拶をし、嫁、婿、仲人夫婦、婿の両親、幼い少女・少年(酒を注ぐ役)は別室へ行った。そこで夫婦の盃、親子の盃を行なった。その後、床の間に戻り盃が終わつた報告をし、祝宴が始まった。

祝宴の始めには仲人・社長・親戚(叔父)が挨拶。祝宴の参加者は仲人夫婦、社長、婿の両親、婿の親戚、組内、嫁方から付き添つてきた人々であつた。祝宴での料理は組内の人が作つてくれた一人ずつのお膳で鮎の寿司、刺身、吸い物等が出され、酒を飲みながら歌や踊りが賑やかに行なわれた。嫁は、別室での盃が終わるとツケサゲ(訪問着)に着替え、料理を食べた後、普段の着物に着替え、お酌や料理を運ぶ手伝いをした。

(四) 婚礼後

婚礼の翌日、嫁と姑は組内に風呂敷を持って挨拶に回つた。婿は朝から組内・親戚を呼び、朝から家で酒を飲む等の座祝いをしていた。三日後に嫁は婿、婿の両親と共に酒を手土産に実家へ一泊の里帰りをした。その時に婿、嫁、婿の両親は親戚の案内役とともに嫁方の親戚回りを行なつた。

三 木頭村の婚姻儀礼における「擬死再生」

前章では、木頭村における伝統的な婚姻儀礼の事例を五例紹介した。ここでは、婚姻儀礼の中の個々の儀礼要素に、具体的にどのような意味が付与されつつ「擬死再生」(生家からの分離/婚家への統合)が実現されていたのかを、儀礼の過程にしたがってみていきたい。

婚姻によって、花嫁は生家の人間から婚家の人間へ生まれ変わらなければ

ならない。そのためにはまず、花嫁は生家から「分離」される必要がある。木頭村の事例において、この「分離」の儀礼に相当すると考えられるのがネキリ酒である。ネキリ酒の慣習は、一見すると結納のようでもあり、婚約を表す儀礼とのみ思われがちである。しかし聞き取り調査によれば、「ネキリ酒を嫁方で飲めば、必ず娘を嫁に出さなくてはならない」(事例1、5)、「ネキリ酒は、花嫁が生家との根(縁)を切ることを意味する」(事例1、4)という話が聞かれ、そこには本質的に生家からの「分離」という意味が含まれていると考えられる。婚礼当日より前に、花嫁を生家から分離する儀礼が行なわれていたのである。これによく似た儀礼が葬礼にも見られる。死者を納棺するまでに、茶碗に水を入れ、シキミの葉を一枚添え、その水を死人の口に注ぐことで別離の挨拶をするというものである。「木頭村誌編集委員会 一九六一—一九〇二」。婚礼の場合は酒を用いているが、何かを飲むことによつて花嫁、死者はイエから分離しているという共通性がある。

では、ネキリ酒と同時に持つていくストには、どのような意味が含まれているのだろうか。聞き取り調査で聞かれたのは、「魚が夫婦の姿を装っている」(事例1、事例5)という話であつた。魚は吉事であることを強調するものであり「波平 一九八八—一九〇二」、新婚夫婦が仲良く結婚生活を送れるようにと願う心が二匹の魚によつて象徴されているのではないだろうか。ここでは、ネキリ酒で「分離」を示す一方で、ストによつて「統合」を導くという論理が見え隠れしている。

次に、婚礼当日の儀礼を見ていきたい。嫁迎え到着後に行なわれる「カドイレ」では、嫁方の家に集まつた親戚や組内に料理や酒がふるまわれるが、このことは花嫁との別れの共食を意味しているものと考えられる。カドイレの儀礼は、葬礼の出棺前に、親戚や組内が集まつて共食をする「デ

ンタチ」という儀礼と類似しているが「近畿民俗学会 一九五八 一二四」、これは最後の共同飲食としての「食い別れ」を意味している。

一般に、嫁が生家を出る際には玄関から家を出るが、木頭村の多くの家では昔は家の玄関と言うものはなく、縁側が出入り口（玄関）として利用されており、正確には縁側から出たということになる。『阿波木頭民俗誌』によれば、木頭村では葬礼の出棺の際、死者を納めた棺は「座敷の口」から出すというが「近畿民俗学会 一九五八 一二四」、これも縁側から出ることと意味しているものと思われる。縁とは家の「フチ」のことであり、内と外、この世とあの世の境界線である。花嫁は死者と同様に生家の境界「縁」を越えることにより、生家から分離することになる。ちなみに高知県物部村でも、花嫁が生家を出る時に、縁を利用して見られる事柄が見られるといい、近藤直也によって同様の解釈がなされている【近藤 一九九四 三七〜四一】。

ここに示したネキリ酒、カドイレといった儀礼には葬礼と多くの類似点があるが、このことは、婚家の人間として生まれ変わるために、花嫁が象徴的に死ぬということの意味している。

そして生家から一旦分離した花嫁は、生家の人間とも婚家の人間ともいえないどっちつかずの中途半端な状態で、仲人・親戚・カイズエと共に婚家へと歩いていく。これはフアン・ヘネツプのいう「過渡」の段階であり、葬礼に類似なものを見出すとすれば、野辺送りに相当する。花嫁の同行者について見ると、木頭村におけるカイズエとは本来、花嫁の世話をする同年代の女性のことであったが、時代が下りるにつれ、利便性の点から髪結いの人がカイズエになっていった。丸山美知子によると、同年代、又は年下の女性がツレ嫁である事例は、男女の寝宿のあった地方に多く、本来は寝宿の仲間になっていたのではないかという【丸山 一九六八 二〇。木頭

村にも昔、寝宿があったことから、カイズエも同様に寝宿仲間の役割であったものと思われる。

婚家へ向かう花嫁は、他にも多くの死者との類似点がある。第一に、花嫁衣装の「白無垢」（事例1）は、死者の着物である白装束と類似している。白という色は、異界から現世への魂の再生である誕生、生家から婚家への魂の移動である婚姻、肉体と魂との分離である死の儀礼で用いられ、霊魂の世界と現世との接点をなす色であった【藤田 一九八五 一一〜九】。

では、白無垢の上に黒の留袖を着ること（事例4）にはどういう意味があるのだろうか。同様の事例は、東京の多摩地域などにも存在していたようである。保坂和子によると、黒の留袖は、江戸時代の武家にとつての礼服の名残であり、中に着る白無垢は隠された喪服として、葬礼に利用するためのものであるという【保坂 一九九四 六五】。昔、日本の多くの地域では葬礼の時、死者以外の人も白い着物を着ていたことから、結婚後に婚家で葬礼があつても、白無垢をすぐ準備できるためだという。白の喪服を同時に着て嫁に行くという、実用的な意味も否定は出来ないが、色の意味を考えるとどうだろうか。白は「生まれ清まり」のように再生を意味し、黒は「黒不浄」から連想される葬のケガレを持つとすると、花嫁衣装は、花嫁が生と死という両方の要素を持っているということの意味しているのではないだろうか。

また、花嫁は「角隠し」をかぶるが、一般に被り物はハレの衣服であり、忌の生活を示すものである【鎌田 一九八二 二五二〜二五九】。角隠しは、死者の頭につける白い三角の布と同じ意味を持っていると思われる。江守五夫によると、新婚夫婦（特に花嫁）は悪霊に取り憑かれやすいという俗信があり【江守 一九九六 四〇】、被り物である綿帽子や角隠しによって上から降りかかる悪霊を防いでいたという【江守 一九八二 四二】。死者

の耳や口・鼻を綿で詰める封印の儀式に見られるように、死者は他の魂が乗り移りやすい存在である。このように、花嫁も死者も被り物をかぶることによって、悪霊を寄せ付けないようにしているのであり、そこにはケガレを防ぎ、祓うという発想の共通性が見てとれる。

また、花嫁行列では必ず提灯を持つと言われるが、これは夜に婚礼が行なわれていたという理由もあるが、夕方の明るい時または昼に婚礼が行われるときにも提灯を持参していたようである。婚姻儀式における「火」や「水」を用いた儀式は江守五夫によって検討されている。江守は、花嫁行列に昼にでも提灯を用いる事例として、鳥根県・山口県・東京都等の事例を挙げ、「昼行灯」の習俗は多くの地域で見られるものであり、松明と同様に「火」のもつ呪術的意味を反映したものであると論じている⁽¹⁾。「火」の呪術的な意味とは、火を跨ぐ習俗や火による嫁迎えの習俗⁽²⁾に見られるように、魔除けの機能をもつ「火」による浄めを意味する。

このように、生家から一旦分離して象徴的に「死んだ」花嫁は、花嫁行列によって婚家に移動した後、婚家の人間として生まれ変わるための統合の儀式を行なっていく。木頭村では、花嫁行列が婚家へ到着すると、花嫁は玄関（縁側）または勝手口から婚家入りしていた。仲人の経験が豊富なN氏によれば、氏の知る限り、木頭村ではすべての婚礼で勝手口からの婚家入りを行っていたという。なお、勝手口から婚家入りするのは嫁入りの場合のみであり、婿入りの場合は玄関（縁側）から婿が婚家入りしていたようである。玄関（縁側）からの婚家入りは、前述したように「縁」、つまり家のフチである境界線を越えることによって婚家の人間として統合することを意味している。

では、嫁入りの場合のみ勝手口から婚家入りをするという現象はどう解釈することができるのか。勝手口は家の裏口であり、炊事場への入り口で

ある。表ではなく、裏の口から入ると考えると、花嫁がケガレていると考えられているゆえに、表から入れないことを意味しているのではないだろうか。また、姑に手をひかれ婚家入りすることをふまえて考えると、炊事場とは主に女性が働く場所であり、そこから姑と共に婚家入りすることで、婚家の人間として生まれ変わったことを婚家の人間に認められたということの意味しているのではないか。

その後、婚家の人間として生まれ変わった花嫁は、夫婦の盃・親子の盃の儀式を経ることによって、確実に婚家へ統合されることになる。その後の祝宴によって、さらに地域社会との統合が果たされるのだが、花嫁は盃の後、又は祝宴の途中で角隠しを取り、普段の着物に着替え、お酌をする等、婚家の手伝いをした。これは普段の着物に着替えることによって、婚家の人間として生まれ変わったことを目に見える形で表していると解釈することができる⁽³⁾。藤田 一九八五 一二。着替えることによって、花嫁のケガレを祓うという意味も含まれていたのではないかと考えられる。

四 おわりに

ここで再び木頭村の婚姻儀式の過程を整理しておきたい（表1）。

まず最初に、花嫁はネキリ酒を交わすことによって、生家との縁を切ることになる。婚礼当日に行なわれるカドイレは、花嫁の生家・組内との食い別れを表す儀式である。最終的には、花嫁が縁から生家を出て、生家のフチ＝境界線を越えることで、花嫁は生家から完全に分離し、象徴的に死んだ存在として婚家へと移動することになるのである。

その後、象徴的に死んだ花嫁は、花嫁行列を組んで婚家へと向かう。フ

空間(場所)	分離		過渡		統合		
	生家	生家の縁	中道	婿家の縁、勝手口	婿家の縁、勝手口	婿家の縁、勝手口	婿家の縁、勝手口
儀礼・習俗	ネキリ酒	カドイレ	花嫁行列	婿家入り	婿家に入り	婿家の縁、勝手口	婿家の縁、勝手口
儀礼の意味	花嫁の生家との縁取り	食い別れ	象徴的に死んだ花嫁を再生へ向けて連れて行く	婿家の再生	婿家の再生	婿家の再生	婿家の再生
主体(参加者)	嫁方、仲人(婿方の代表)	花嫁、嫁の両親、仲人、婿の親戚、嫁の親戚、嫁の縁の組内	花嫁、仲人、嫁の兄弟、婿の親戚、カインユ	姑、花嫁	婿、婿の両親、婿の親戚、婿の親戚、婿の親戚、婿の親戚	婿、婿の両親、婿の親戚、婿の親戚、婿の親戚、婿の親戚	婿、婿の両親、婿の親戚、婿の親戚、婿の親戚、婿の親戚

表1 木頭村ににおける結婚儀礼の過程

アン・ヘネップによれば「過渡」の段階である。

花嫁は、縁または勝手口から婿家に入り、夫婦・親子の盃を交わすことにより婿家(イエ)へと統合される。婚礼後の祝宴には婿の組内の人も参加し、花嫁はここで地域社会にも統合される。ここで花嫁が衣装替えをすることは、花嫁がそのケガレを洗い落とし、完全に婿家の人間として再生したことを意味しているものと考えられる。

このように、花嫁はいくつかの儀礼の過程を踏むことによって「段階的に」死に(生家から分離し)、また「段階的に」婿家の人間として生まれ変わる(婿家に統合される)。もちろん一度の分離儀礼、一度の統合儀礼によって、一気に花嫁が(象徴的に)死に、再生することも可能であると思われるが、このようにあえて同種(分離、統合)の意味を持った儀礼を積み重ねることによって、確実な分離/統合を達成することにも、その移行をよりスムーズなものにすることを可能にしているのである。

【付記】

本稿は、二〇〇四年一月に徳島大学総合科学部に提出した卒業論文の一部である。

注

(1) 花嫁が婿家の入口で薫火や松明をまたぎ、婿家に入っていく等の習俗。関東地方と長野県に分布している。

(2) 花嫁が松明の下を潜る、または二つの松明の間を通り抜け、婿家に入っていく等の習俗。

参考文献

石川博史・村野晴子 一九七〇 「木頭村の人口変動について」 阿波学

会編『総合学術調査報告 木頭』(郷土研究発表会紀要一六) 徳島県立図書館 五五〇七

江守五夫 一九八二a 「婚礼の際の悪霊と呪的習俗―日本婚姻儀礼論ノ

ート(一)」 『書斎の窓』三二七 有斐閣 三七〇四三

江守五夫 一九八二b 「新郎新婦の擬装―日本婚姻儀礼論ノート(二)」

『書斎の窓』三一九 有斐閣 七三〇七七

江守五夫 一九八三 「日本の婚姻儀礼における『火』と『水』」 『千葉

大学法経研究』一三 九九〇一四六

江守五夫 一九九六 「婚姻の民俗からみた日本」 『民俗学研究所紀要』

二〇 二三〇五六

鎌田久子 一九八二 「婚姻儀礼における関与者―特に嫁の同行者につい

て」 『日本常民文化紀要』八―二 二二九〇二五八

近畿民俗学会 一九五八 『阿波木頭民俗誌』 凌霄文庫

小林忠雄 一九九三 『色彩のフォークロア』 雄山閣出版

近藤直也 一九九四 「異界と花嫁―高知県物部村に於ける婚姻儀礼の概

要」 『近畿民俗』一三六・一三七 二七〇四六

近藤直也 一九九五 「ケガレとしての花嫁」 『近畿民俗』一三九・一

四〇 五三〇七六

坂本要 一九八五 「人生儀礼(特集)・日本民俗学の研究動向 昭和五八

・五九年)」 『日本民俗学』一六〇 二二〇三三

新谷尚紀 一九八五 「通過儀礼Ⅲ 結婚・年祝・葬送」 『歴史と地理

日本史の研究』 山川出版社 三九〇五八

鈴木正崇 一九九八 「通過儀礼」 赤田光男・福田アジオ編『講座日本

の民俗学六 時間の民俗』 雄山閣出版 二〇五〇三三四

高橋晋一編 一九九八 『日和佐八幡神社祭礼/徳島の結婚』 徳島大学

総合科学部文化人類学研究室

木頭村誌編集委員会編 一九六一 『木頭村誌』 徳島県那賀郡木頭村

波平恵美子 一九八八 『ケガレの構造』 青土社

福田アジオ・宮田登編 一九八三 『日本民俗学概論』 吉川弘文館

ファン・ヘネップ 一九七七(一九〇九) 『通過儀礼』 綾部恒雄・裕

子訳 弘文堂

藤田稔 一九八五 「人の一生と死と再生」 『茨城の民俗』二四 一〇

一一

文化庁編 一九七八 『日本民俗地図VI(婚姻)』 国土地理協会

保坂和子 一九九四 「花嫁衣裳の民俗―『ひっかえし』の系譜」 『女

性と経験』一九 六四〇六八

丸山美知子 一九八二 「婚姻儀礼にみる『ツレ』」 『民俗』 国書刊行

会 六八九〇六九四

宮田登 一九九六 『ケガレの民俗誌―差別の文化的要因』 人文書院

(二七七一一〇二〇一) 徳島県板野郡松茂町中喜来字稲本六八―二三